

## 日本の開発援助

我が国の開発援助の特徴の一つは要請主義である。援助は、相手国の要請に対して純粋に答えるものであり、特定の価値観・思想を押し付けるものではないという原則からそのようになっている。1954年コロンボ計画に加盟して依頼、我が国の開発援助は一貫してこの原則を掲げている。我が国の開発援助が日本的な価値観、例えば、大東亜共栄圏のような政治思想の拡散につながるのではないかという戦勝国の猜疑心に対する対応として、当時は、この原則を強く唱える必要があったのだろう。この原則には無理がある。物やサービスのシステムは、単にそこに物理的に存在しているだけではない。それを作った人の思いや価値観が反映されており、現にそれを使う人たちにその価値観は伝わり、使われることによって、物やシステムに新たな価値観が付与される。価値観や思想から自由な開発援助はあり得ない。現に、アメリカの開発協力には、自由と民主主義という明瞭な価値観がある。もっと踏み込めば、アメリカ型の資本主義経済というものもあるかもしれない。

小はモーターボートの援助から、大は都市づくりまで、実際に開発計画を書いてみればすぐわかるが、何らかの価値観、理想にしたがって目標を掲げ、その目標達成のために、予算と時間の範囲で合理的な計画を立てる。目標がなければ計画を立てられない。その計画に沿ってプロジェクトを実施し、事後に目標の達成度を評価する。プロジェクトとの評価では、計画、実施、プロジェクト終了の流れの中で、一貫して目標が貫かれているプロジェクトが高く評価される。価値観や思想を伴う目標抜きとってしまうと、数量的達成率、援助した物・施設・システムの利用度、経済波及効果などがプロジェクト評価の項目になる。実際、我が国の開発プロジェクトの評価のほとんどは、こうした項目でしか評価していない。そのような評価基準の基づいて行われる開発プロジェクトは、意味もなくやたらに巨大な中国の箱もの援助と大して変わらない。必要かつ困難なことは、問題を抱えた人々の根底にある、地域集団の意識や社会システムの改善である。現在の開発プロジェクトの事後評価システムでは、根底にある問題が改善されたとしても、それが評価されることはないので、社会システムの改善などのプロジェクトは敬遠されることになる。要請主義は仕方がないにしても、価値観や思想をプロジェクトの目標から抜き去ってしまうことは、体に悪いものがあるかもしれないという理由で、サンマの塩焼きをさらに蒸して、油やうまみ成分を抜いてお殿様に食べさせた、「目黒のサンマ」の家来を笑えない。かといって、今の時代に、特定のイデオロギーや「思想」を開発計画にまぶしてみても、そんなものを単純に信じる人はまずいないだろう。実際、そんなものを高々と掲げて、異なる文化や歴史を持つ地域に無遠慮に入り込まれても迷惑だろうし、客観的には漫画的で滑稽だ。私は、日本の問題解決法というのを、援助の背景の哲学として、そういう考え方あるいは手法を様々な国と共有するという目的を掲げたらよいと思っている。

私が考える日本的な思考とは以下のようなものである。

日本は中国文化圏の中の国であり、中国文化の影響を強く受けて今の日本の文化があると考えている人が多いようだ。私はそうは考えない。日本は中国的ではない。少なくとも全く中国的でないものを基本のところを持っている。その点で韓国とも大いに異なる。一言でいえば、日本人は「革命」という考え方をしない。ここでいう「革命」とはいわゆる社会主義革命という狭い意味ではない。本来の意味である「易姓革命」を含めた、もっと大きな意味での革命、天命があらたまることである。以前の支配者が別に支配者に代わる。ある価値観が否定されて別の価値観が支配的になるというような場面を考えればよい。こういう場面で、日本人は中国人や韓国人とは決定的に違う。中国の文化では、以前に支配層と新しい支配層の関係は徹底した敗者と勝者の関係である。前者は全面的に否定されるべき存在であり、後者は全面的な正義として肯定される。多くの場合、そのような歴史観で恣意的に歴史が書かれる。

こういって、どこの文化にも、政治的・軍事的敗者が神として祀られる文化があるという反論があるだろう。確かに、封神演義などにみられるように、死者が神として祀られるという文化は中国にもある。平将門の神田明神、菅原道真の天神様など、日本にも崇りを怖れて非業のうちに最期を遂げた敗者を祀る文化があることから、そんなものはどこでも共通しているという人もいるだろう。私が言いたいのはそういうことではない。勝者となった次の支配者によって、敗者が持っていた過去の文化が悪として完全に否定され破壊されることがない文化だと言いたいのである。

明治維新を西欧的な意味で、何らかの革命ととらえようとする人たちがいる。これは無理である。明治以後も徳川慶喜は華族となっているし、函館戦争を戦った幕臣榎本武揚は明治政府で、逓信大臣、文部大臣、外務大臣、農商務大臣となっている。勝海舟は大政奉還以前から複雑な行動をしていて、彼の意見や実際の行動がどんな見通しを持っていたのかはわからないが、少なくとも幕臣であったことは確かだ。それでも明治政府でも様々な仕事をしている。勝の行動には明治政府とつかず離れずという距離感があって、確かに大局観に明るい。こういう人物には当然批判者もいるし、極めて高く評価する人もいる。しかし、彼が幕臣であったことをもって、彼を貶めようとする人はいない。細かい部分的な判断はさておき、公議政体論など、幕臣であった時から、国際社会の中で目指すべき大きな方向性をとらえて具体的に活動していた。おそらくそういう人は当時の日本の各層にいたのだろう。革命によって、正しい歴史を作り、旧体制派であるという理由だけで、彼らを悪として葬れば、歴史の積み重ねを否定して、時間が後退してしまう。革命の正当化のために、「正しい歴史」を書こうとする人は、歴史を否定しているのである。それをしなかったからこそ明治期の日本の発展があったのだと思っている。第二次世界大戦の敗戦を、日本のもう一つの革命だと解釈したがる人、あるいはそうでなければならないと思っている人もいるようだ。そんなことはない。戦後の発展の契機は、様々なレベルで行われた戦前の努力によるのだ。表向きはともかく、日本はそうしたものを上手に継承してきた。それは極めて日本的で、決して革命的(中国文化的)ではない。日本に毛沢東は生まれない。ああいう愚かな大虐殺者が出ない文化と

というのは大変結構なことだと思う。

敵対者を含めて他者を知り、その価値を認めて、大きな方向性の中でどのような関係をつくり、どのように妥協するのが最善かを考える。そういう柔軟でしたたかな能力を涵養することは、途上国の発展にとって、技術や思想の伝授よりもはるかに重要なことであろう。そうした懐の深い「日本的」考え方の普及を援助の上位目標におくことを私は提唱する。それは、おそらく他国にできないことである。